STOP! 薬物再乱用

薬物犯罪対策には、再乱用防止活動が極めて重要です。薬物再乱用防止活動は、薬物犯罪の減少だけでなく、当事者が薬物依存症という病気に立ち向かい、社会復帰への道を歩むことにつながるからです。

薬物に関する正しい知識と当事者の回復・支援について知りましょう。

薬物再乱用防止に関する国の制度

「刑の一部執行猶予制度」について

全国の覚醒剤事犯における再犯者率は6割の一定値を保った状態であり、また、年齢が上がるにつれて再犯者率が上昇しています（下表）。

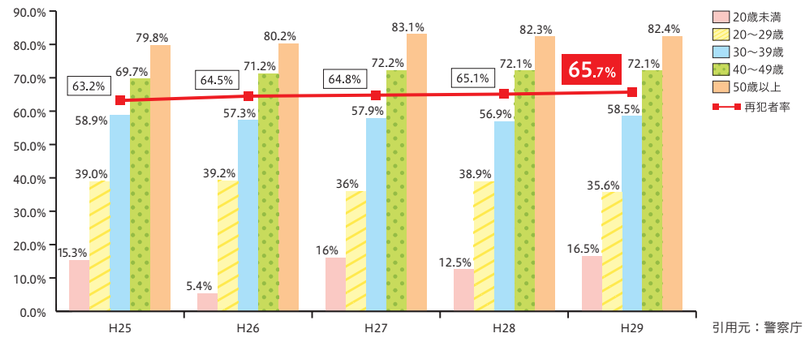
このような状況を受け、平成 28 年 6 月 1 日より**「刑の一部執行猶予制度」**が施行されました。

これまで刑の言い渡しの選択肢としては、全部実刑か全部執行猶予のいずれかしか存在しませんでした。

しかし、薬物事犯者等の再犯防止・改善更生の観点から、一定期間刑事施設で処遇を受けた後、社会内での処遇を実施することが有用と考えられる場合は、刑期のうち、一部を実刑とするとともに、残りの刑期を執行猶予とし、保護観察を受けながら社会復帰を目指せるようになりました。

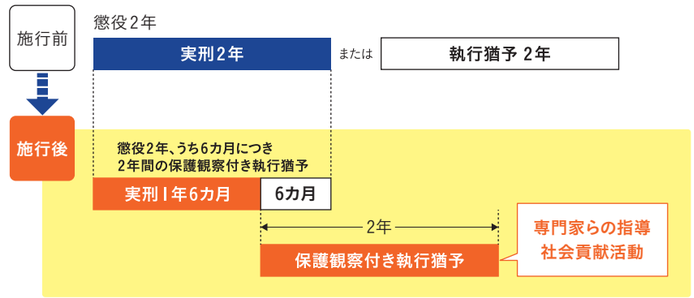
このような制度ができた背景としては、処遇的な観点だけではなく治療的な観点も踏まえている点が挙げられます。出所後の執行猶予期間中に専門的処遇プログラムの受講や、社会貢献活動などを行わせることで、社会内の様々な誘惑にさらされても、再犯にいたらない生活を送れるように促すことを目的としています。

覚醒剤事犯の再犯者率の推移（全国）



引用元：警察庁

刑の一部執行猶予制度イメージ

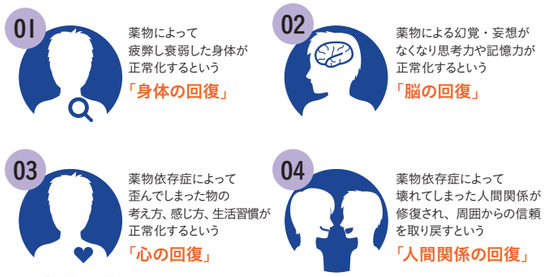


回復への道と支援機関

回復への道

一度依存症になってしまった脳は、元の状態には戻らないと考えられています。その意味では依存症が完治するということはありません。ですが、治療を受け、薬物を止め続けることで通常の社会生活を歩み、薬物によって失ったものを少しずつ取り戻すことは可能です。これを「回復」と言います。

回復には、大きく分けて右図のように4つの段階があります。



出典：「ご家族の薬物問題でお困りの方へ」(厚生労働省)

辛抱強く付き合い、「止め続ける」というのは容易なことではありません。一人で止め続けるのは非常に難しいことです。薬物を止め続けるためには、治療プログラムや理解してくれる人との共同作業、自身が安心できる環境、健康的な生活などが必要であり、家族や支援機関のサポート、相談できる窓口が大切になってきます。

支援機関

家族の薬物問題で悩む方を支援しています

薬物乱用を繰り返していると、薬物依存という状態になります。薬物依存は慢性疾患ですが、適切な治療や対処法を学ぶことで回復することができます。

薬物依存から回復するためには、正しい知識を持つことが大切です。一人で悩まず支援機関に相談して、回復を目指すことが重要です。

精神保健福祉センター

精神保健福祉センターでは、薬物問題に関する個別相談等に応じています。また、集団認知行動療法による当事者向けの薬物再乱用防止プログラムや家族の対応を学ぶための家族講座などを実施しています。まずは、電話で相談してみましょう。

都内の精神保健福祉センター

センター名／所在地	電話番号
東京都立精神保健福祉センター 台東区下谷 1-1-3	(03)3844-2212
東京都立 中部総合精神保健福祉センター 世田谷区上北沢2-1-7	(03)3302-7711
東京都立 多摩総合精神保健福祉センター 多摩市中沢2-1-3	(042)371-5560

精神保健福祉センターは各都道府県及び政令指定都市にあります。また、各地域の保健所でも薬物問題をはじめ健康相談を受け付けています。

このほかにも…

薬物依存症からの回復のためのリハビリ施設ダルク（DARC）や家族会、家族や友人などの薬物の問題で苦しんでいる人のための自助グループであるナラノン等が全国にあり、薬物問題で悩みを抱えている方々を支援しています。

薬物問題で悩むご家族向け読本
厚生労働省ホームページからご覧になれます。

http://www.mhlw.go.jp/bunya/iyakuhin/dl/yakubutu_kazoku.pdf

ご家族の薬物問題でお困りの方へ　検索

? 薬物依存の当事者はどこに相談するの?

依存症の治療をしている医療機関はもちろん、全国の精神保健福祉センターや保健所で薬物問題の相談を受け付けています。また、薬物依存症当事者の自助グループNA（ナルコティクス アノニマス）のミーティングは全国で開催されていて、仲間とともに回復を目指しています。

NA ホームページ　**http://najapan.org**

警視庁

依存症のメカニズム

薬物依存症とは？

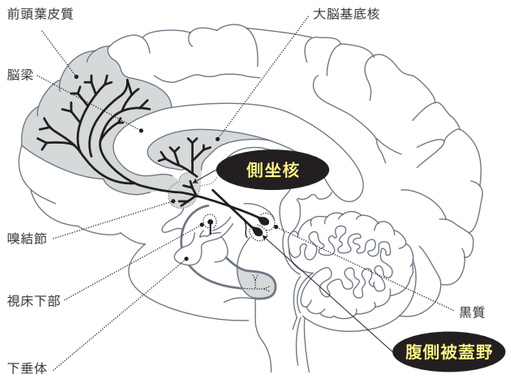
自分では止めよう、控えようと思っているのに何度も失敗し、薬物の使用が自分の意志ではコントロールできない（やめたくても、やめられない）状態になることを依存症といいます。

なぜ薬物依存に陥ってしまうのか？～薬物がもたらす脳への影響

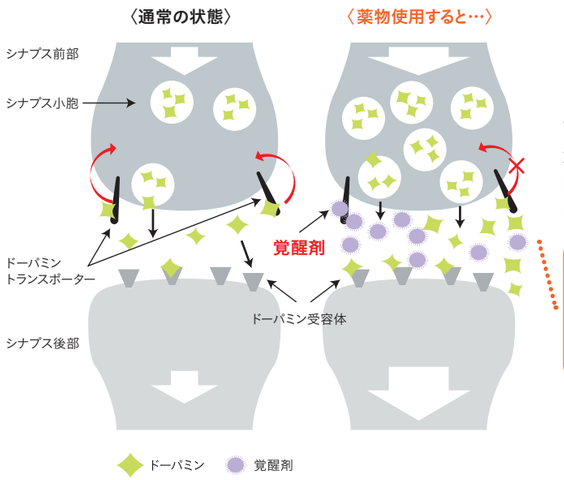
どうして「やめたくても、やめられない」状態に陥ってしまうのか。それは、薬物が脳内にある快感の中枢ともいうべき部位をダイレクトに刺激する点にあります。これが原因で、薬物には常習性があります。

中脳の腹側被蓋野という部位から大脳の前方や下面に神経細胞の線維が延び、神経回路を作っています。この神経回路は「報酬系」と呼ばれ、快感の中枢を司っています。

この回路を支配しているのはドーパミンという「よろこび、快感、意欲、活力、運動機能」等に関係する神経伝達物質です。



出典「依存性薬物と乱用・依存・中毒」（和田 清）



報酬系には、それぞれの細胞のつなぎ目のところでドーパミンを分泌し、それを介して快刺激の情報を伝達しあっていますが、薬物はこの報酬系を刺激し、強制的にドーパミンを分泌させます。報酬系が繰り返し刺激されることによって、脳内の神経系には元に戻せない変化が生じ、薬物使用をコントロールする力が失われていき、薬物依存に陥ってしまいます。

覚醒剤を使うことで中枢神経系におけるドーパミンの活性が必要以上に高まり、報酬系を刺激する

↓

強烈な快感をもたらす

コラム 「乱用」「依存」「中毒」の区別

薬物乱用の分野で、混同されやすい用語を整理しました。

乱 用	薬物を社会規範から逸脱した目的や方法で自己使用すること。社会規範からの逸脱には、法の逸脱、目的や使用方法の逸脱、社会の常識や約束事からの逸脱がある。 例えば、法律で使用が禁じられている薬物（違法薬物）を一度でも使用すれば乱用となる。	
依 存	自己の薬物使用をコントロールできず、やめられない状態。	
中 毒	①急性中毒	大量の薬物を短時間に摂取するような乱用の結果として起こる心身の異常。依存とは関係ない。
	②慢性中毒	長期間にわたり、依存に基づく乱用を繰り返した結果として生じる心身の異常。

薬物乱用がもたらす影響

耐 性　**薬物を乱用し続けるうちに、同じ量では効かなくなってしまう**

薬物を繰り返し使用することによって、薬物に対して中枢神経が適応した状態になってしまいます。これを「耐性」と呼びます。元々は効用があった量では効かなくなり、摂取量や回数が増えていく悪循環に陥ってしまいます。

※イメージ

依 存　**薬物乱用の結果、自己の薬物使用をコントロールできず、やめられない状態**

薬物の乱用を繰り返すと、薬物依存という状態に陥ります。薬物依存とは、薬物の乱用を繰り返した結果として生じた脳の慢性的な異常状態であり、その薬物の使用を止めようと思っても、渇望を自己コントロールできずに薬物を乱用してしまう状態のことです。

薬物依存は、「身体依存」と「精神依存」に大別できます。

薬物依存

- **身体依存**：薬物が欲しいという強い欲求（離脱症状）に抗えず、自制が効かなくなった脳の状態
- **精神依存**：精神的に薬物に頼っている状態で、薬物に対する脅迫的欲求（渇望）を示す状態

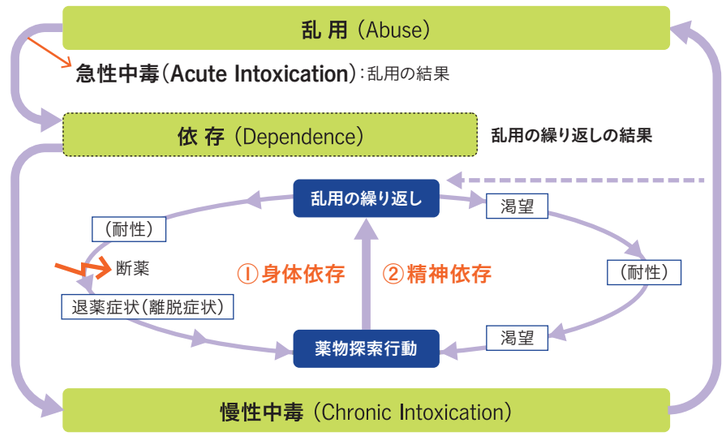
依存形成

薬物を使い続けると、体の中に薬物があるのが通常という状態になってしまい、薬物の効果が切れると体に異変が起きるようになります。手の震えや幻覚のような離脱症状（禁断症状）が現れます。そしてその症状の苦痛から逃れるために、手段を選ばず薬物を手に入れようと「薬物探索行動」に向かい、薬物の乱用が繰り返されます。これを身体依存といいます（下表①）

一方、薬物が欲しいという強い欲求（渇望）に負けてコントロールが利かなくなった脳は、渇望を満たすためになんとしても薬物を手に入れようと「薬物探索行動」を起こし、乱用を繰り返してしまいます。これを精神依存といいます（下表②）

このようにしてまた薬物を乱用し、さらに依存状態が悪化し、薬物が切れると薬物探索行動に走り、という悪循環（依存症サイクル）に陥り、どんどん深みにはまっていくことになります。

依存性薬物乱用の最大の怖さは、このような依存形成にあります。



出典「依存性薬物と乱用・依存・中毒」（和田 清）